

## 英語のあいまい母音 schwa の発音

英語の about の a や circus の u の音は「あいまい母音」schwa と呼ばれる。発音記号では /ə/ で表される。この発音について「そのつづり字本来の母音を弱く発音した音」というような説明をよく見掛ける。例えば大修館書店の「プラクティカルジーニアス英和辞典」(2004年)や「ジーニアス和英辞典」(第2版第8刷, 2010年)などでそう説明している。about や woman の a は「ア」を, silent の e は「エ」を, family の i は「イ」を, lemon の o は「オ」を, ammonium や circus の u は「ウ」を弱く発音するという意味のようだが, これは間違った説明である。(u は cut ではア, put ではウに近く発音されることを考えると, u の「つづり字本来の音」とは, アなのか, ウなのか, どちらなのだろうか?)

まず, この説明で困る具体例を挙げよう。三省堂の「新グローバル英和辞典」(Yahoo 辞書 <http://dic.yahoo.co.jp/> で検索可能) や Merriam-Webster's Learner's Dictionary (<http://www.learnersdictionary.com/>) で「able」を調べると /éibəl/ という発音が載っているが, この場合, /ə/ の部分のつづりに母音字がないのであるから, 「つづり字本来の母音を…」では, この発音ができないことになってしまう。famous の ou や Edinburgh の gh の発音も /ə/ であるが, これらはどう発音せよというのであろうか。さらに, 定冠詞の the, 助動詞の do, 前置詞の to の発音は子音の前でそれぞれ /ðə/, /də/, /tə/ であり, それらの母音は schwa であるが, これらはそれぞれ「エ」, 「オ」, 「オ」のように発音せよというのであろうか。もっとも, 「プラクティカルジーニアス英和辞典」などには「today の /tə-/ の母音は /tu-/ の方に寄った音」というような説明がある。この説明は上に指摘した「つづり字本来の音」という説明と矛盾するというところにその辞典の編者は気付いていないようである。

「つづり字本来の母音を…」では矛盾する例をさらに挙げておこう。次のつづりは, くだけた非公式の文章中で発音どおりに右のように書かれるということが辞書にも載っている。

want to → wanna

going to → gonna

a lot of people → allota people

got you → gotcha

what do you → whaddaya

hell of a → helluva

これらのうち、「want to」の「want」と「to」の子音字「t」が「n」に変化しているのは、その前にある「want」の「n」の音に影響されて「同化」という現象を起こしたためである（これは音声学でいうところの「進行同化」）。「got you」の中間の子音字が「tch」に変わっているのも同じく同化によるものである（ただし、こちらは音声学でいうところの「融合同化」）。「going to」の中間の音の変化も同化であるが、ここでは「進行同化」と「逆行同化」が少し複雑に起こっている。それで、「to」や「do」の「o」が「a」に、「a lot of」の「of」が「a」に（「of」の「f」は次の単語の初めの子音の影響を受けて「脱落」した）、「you」の「ou」が「a」にそれぞれ変化したのはどうしてだろうか。これらは、そのいずれの母音も弱形で /ə/ が使われている単語である。もし /ə/ の発音がつづり字の o や ou の発音を保持するというのなら、このようにつづられることは説明できないことになるだろう。これは「to」が「タ」、「do」が「ダ」のように発音されるからに他ならない。また、「discernible」を教養あるネイティブでも「discernable」と間違っつつづっているのを見かけることがあるが、これも「ni」の部分の発音 /nə/ を「ナ」のように発音しているため、決してつづりの「ni」から「ニ」のように発音しているわけではないということの表れである。

もう少し正確に言うと、/ə/ の発音が日本語の「ア」のように発音されるというのは不適切で、この音は（前舌でも後舌でもない）中舌母音であり、舌の高さの点でも（高くも低くもない）中位で、日本語のア、イ、ウ、エ、オのどれともとれるような、それらをつきまぜたような不明瞭な母音である（松坂ヒロシ著：研究社「英語音声学入門」（1986年）p.37 参照）。ただ、その音を彼らは「a」とつづる傾向があるということは、彼らにとってその音が「a」で表される音を弱く発音したものと同じと感じていることの表れなのである。（helluva では u になっているが、これも cut などから連想されるアに近い音を弱くした発音ということだろう。）

「to」や「do」が弱形で発音されるはずの場所で、子音の前でも /tu/ や /du/ のように発音されることがあるのは事実だが、これは、十分な速さのない場合である。ゆっくり発音する場合は、英語ではそれぞれの単語が強形で発音される傾向がある。この事実のために、to の弱形は「トゥ」のように発音するのだという誤解が生じているのであろう。不定冠詞の「a」の発音は強形 /éi/, 弱形 /ə/ だが、特に強調する必要もないのに、ゆっくり読んだり口ごもったりするときには /éi/ と発音されるというのは、よく経験することである。しかし、それ

だからといって、/ə/ は「エイ」のようにも発音するのだと考えたら間違いだということは容易に理解できるのではないだろうか。「/ə/ はつづり字本来の母音を弱く発音する」と考えている人は、それと同じ間違いを犯しているのであろう。

さらに次の事実を指摘しておこう。Oxford Advanced Learner's Dictionary (日本語名は「オックスフォード現代英英辞典」) のサイト <http://www.oxfordadvancedlearnersdictionary.com/> で gentleman とその複数形 gentlemen の両方の発音が聞けるので聞いてみられたい。これらの発音は発音記号でいずれも /dʒɛntlmən/ であり、実際の発音も全く同じであることが分かるだろう。単語全体の発音記号が全く同じなのに、実際の発音が異なるなんてことがあるとしたら、それは発音記号の役割を果たさないことになる。もちろん現在の発音記号が完全だとは思っていないが、英語の発音について、このような不備があるはずはなかろう。また、「family」の「i」, 「Helen」の2番目の「e」, 「alibi」の真ん中の母音の「i」などの schwa のネイティブの発音を、先入観を持たずに聞いていただければ、多くの場合いずれも「ア」を弱くしたような音に聞こえるはずである。The Tennessee Waltz という有名な曲がある。「Tennessee」の「ne」の部分の発音は私は /ne/ だと思い込んでいたのだが、あるとき、この曲をアメリカ人が歌っているのを聞いたら、これが「ナ」のように聞こえたことから、この母音が schwa だということを見つけた次第である。さらに、上で引用したオックスフォード現代英英辞典には「wanna」が「want to」と「want a」の両方の形の非公式な書き方であると説明してある。これは「want to」が「want a」と同じように発音されることを示している。実際、ラジオの英語講座で「You should take up fishing if you want a relaxing hobby.」という文章が読まれたのをテキストなしで聞いたとき、初め「want a」の部分は「want to」と言ったのかと思った。ただ、そうするとその後の「relaxing hobby」に続くのは文法的に成り立たないことから、正しくは「want a」だと分かったわけである。

以上、誤解の多い英語の schwa の発音について私の理解に基づいて解説した。私は音声学の専門家ではないので、専門家のご教示をいただければ幸いである。

相馬 充 (国立天文台)  
(2010年11月記)

HOME URL: <http://optik2.mtk.nao.ac.jp/~somamt/>

解説: <http://optik2.mtk.nao.ac.jp/~somamt/kaisetsu.html>